

# 『本日はお休みをさせていただきます』

椎堂 栄樹

4,463 文字

あらすじ

予期せぬタイミングで入院することになった働き盛りの独身男性である私。  
思いがけない人生のターニングポイントに現れた一人の女性と、それによって気づいたちょっとしたことで変わる世界。  
大切なのは驚くほど特別な事ではないと知る。

プラスチックの机の上で響くキータッチ音は、どこか軽く部屋じゅうに響き渡る。今まで特に意識をして考えたことはなかったが、自宅のテーブルは木製だし職場のデスクは何かしらの金属製だ。たまにパソコンを抱えて入る喫茶も立派な木のテーブルを設けている。

プラスチックの机、しかも支柱が片側だけだというのは何とも心許ない。

いや贅沢は言えない。今、この環境が何よりの贅沢なのだ。

四日前、確か、四日前だったと思うがその夜中、人生の非常事態は起きた。これまでに感じたことが無い痛み、冷や汗、めまい。痛いのが腹なのか胸なのか背中なのかもわからなくなり、うずくまって一ミリも動けず……——いや、実際は散々のたうち回った挙句二、三メートル先に転がっている携帯電話まで這いつくばり救急車を呼んだ。

青年と中年の間くらいの年齢である自分が何の前触れもなく倒れるとは、よもや予想もしていなかった。

駆けつけてくれた救急隊によって、エレベーターに収まる座位の担架で運び込まれている横で、ずっとあちこちへ電話で連絡を取っている救急隊員の男性の声がうっすらと聞こえてくる。

「そうですか、そちらでは難しい？わかりました」

何件目になるだろう、この電話で行き先が決まらねば救急車内へたどり着いたとて出発も出来ないのか。車で行けば十五分圏内に大きく立派な病院が片手では収まらないほどある都会なのにも関わらず、だ。

まさか自分が経験する事になるとは思わなかったが、これがいわゆる“たらいまわし”なのだ気が遠のきかける。

「……はい、わかりました！では、オイ、五分だな？すみません、五分で！」

電話を握りしめる男性の声が、充填されたように活力でみなぎる。通話を早々に終えると運転席の方へ早口で指示を出し、「行くぞ！お兄さん、もう少しですよ！」と後ろを振り返り、力強い声を部下にも私にも送り出して、車は地を這うように、それでいて飛行機の離陸のような勢いで発進をした。

かくして、行き先の決まった私は待っている時間が嘘のような迅速さで搬送され、途切れの無い痛みや苦しさで戦っている間に検査や処置をされ、朦朧とした意識の中で病状の報告を受け、有無を言わず入院が決まったのだ。

薄い水色の制服を身につけた看護師の女性が申し訳なさそうな表情で話す、「当院、

現在空いている病室が個室のみとなっております…」と言った一連のベッド代や入院費を了承して無事、危機的状況からの安眠を手にいれた。

充てがわれた部屋は東向き、シャワーブースとトイレ付きの個室。出張で宿泊する様なビジネスホテル等よりも広く、清潔感にあふれ雰囲気が良い。

大部屋に比べて、一日にかかる差額は大きいが一瞬も早く取り除かれた苦しみやこの安堵感を思えばその分働けば良いとさえ思えた。

慣れない繋がればなしの点滴も、これのおかげであの痛みから解放されているのだ。静かな一人きりの部屋は淀みのない穏やかな時間で満たされていた。

病気をしてみると人生観が変わる、と誰かが言っていた。そこまでの大ごとではないにしろ、その言葉が染み渡るように眠った。

翌朝も早くから、検温回診朝食点滴の付け替え、と決まった儀式のように続く来訪を終え、ようやく一息つきながらベッドへ横たわったのは午前九時半頃。一報はメールにて入れてあったものの、改めて職場への連絡を始めたその時。

「失礼します、お掃除に入らせていただきます！」

大声、という訳でもないが張りのある声が室内に響く。母親よりも少し上くらいの年齢だろうか、背筋のまっすぐな女性だった。

それから毎朝——今日で四回目だが、九時半から四十五分の間には必ず、同じお掃除さんがやってきてくれる。

一言も変わらぬ挨拶から始まってゴミ箱の中身を捨て、隅々まで床を掃きそれが終わると別のモップを掛ける。ベッドの上で過ごしている身で、見舞いの来訪もない以上、部屋は汚れることもさほどないのだが、やはりモップ掛け直後の床をスリッパで歩けばキュッキュッと良い音がする。

自宅のものよりも立派な洗面台に、うっかり使ったまま散乱させていた歯ブラシを丁寧に棚へ移し、鏡やボウルに何かを吹き付けてこれもまた磨き上げる。その後ろ姿は腰が入っていて何かしらのトレーニングをしているように見える程、良い動きだ。

シャワーブースとトイレはより時間をかけて丹念に手入れされる。シャワーカーテンなどに少し残っていた湿り気も清掃後にはすっかり湿気が取られて小さい水滴ひとつ無い。

お掃除さんが部屋にいる間は、個室のドアも開け放たれる。その状況で、自分はベッドに寝るなり座るなりの姿のまま、周りをくまなく清掃されるのはなかなか身の置き場がない。とはいえ、きちんとしようとベッドを降りて面会者用の椅子に座っているのでは逆

に作業の邪魔をしてしまう。

日曜に母親が掃除をしている中、寝転がっていた父の心境がいまになってよりわからなくなったし、自分には到底できそうにない。

思案の結果、二日目からはテレビではワイドショーをかけ、自分はベッドの上で正座をしてキーボードへ向かうことにした。

私のことは気にせず、どうぞよろしくお願いします。

そう伝わることを願いつつお掃除さんの行動をなんとなく見ていると、看護師さんたちとは違い、天気の話ひとつしないことに気づいた。

病棟という場所柄なのか、みだりに話してはいけないのだろう。

だが、たまたま通りかかった別の部屋ではおそらく患者のおばあさんに延々と世間話を振られている声が漏れ聞こえ、お掃除さんもそれに応えていた。規則として患者さんと一切会話をしてはいけないではなく、自分から話しかけてはだめ、と言うものなのかもしれない。

とは言え自分から振る話題も見当たらず、逆にあれこれ聞かれても会話が弾む想像が全く出来ない。かといって無音は空気が重い……と、考えた末のテレビだった。

それをたまに横目で眺めながら軽快に床を磨いてくれている姿をこちらも横目で見て、ささやかなおもてなしが成功しているようで、私はパソコンの画面に向かいつつ思わず頬が緩んでしまう。

安静が必要な身の辺を整え、清らかな気持ちで過ごせる場所を作ってくれているのに「失礼いたしました」と部屋を出ていく時に伝える「ありがとうございます」の一言ではあまりに足りていない気がしていたので、一方的ではあるが気持ちの通じた様な思いだ。

ささやかなおもてなしを続けているうちに、チラリとテレビを気にしつつも全く隙のないお掃除さんがやってくる事が朝の楽しみになっていた。無表情に会話もないが、その手際の良さと細かい気配りはさすがプロであり、清々しい一日を整えてくれる人がいるという心の安らぎでもある。

土曜日もやってきてくれた時には休みがないのではないかと心配になったが、日曜日の朝、今日はお掃除自体がお休みだった時にはほっとした。

個室での入院費用を少しでも補おうと、ベッドの上で仕事をこなしていた事が結果的に十分な安静となり、二週間を待たずして治療が通院でも構わないとお達しを受ける

事が出来た。入院も急だったが退院と言うのも急なもので知らされたのは前日の夜。

回診の医師がそれを告げて部屋を出たあと、慌ててちょこちょこ増えてしまった私物を整え、翌朝に備えた準備に追われる事となった。

雑誌や新聞紙を一つ所に置き、備品のタオルやカップを見苦しくないよう整え、ペットボトルはゴミ箱へ入れずまとめて別途ビニール袋へとおさめる。

最後の夜と分かれば日を増すごとにやはり気にかかっていた入院費用も忘れ、部屋に名残惜しさすら感じるから不思議なものだ。退院時刻は十時半と聞いている。せめて寝間着ではない姿でお掃除さんを迎えられそうだ。最後の「ありがとうございます」は、居住まいを正して言おう。

救急車は五分とはいかないまでも、ものすごいスピードで到着したのだな、と、タクシーが自宅前へ着いた時に実感した。当然ながら一週間前、嵐のように出て行った部屋は自動的に美しくなる事もなくそのままだ。

運び出された時にぶつかったのであろう、立てかけてあった傘やスポーツ用品があちこちに向かって倒れているのが生々しい。

ふと、我が家の匂いが鼻腔を通り抜ける。落ち着く匂いと、目につく散らかり具合。その差はなかなかの物だった。そう感じた瞬間、先ほどまでいた病室が頭をよぎる。退院する事が伝えられていたのか、今朝は十時を過ぎてもお掃除さんは現れないまま退院の時間を迎えた。よく考えれば、ベッドから何からの大掃除になるのであろう事は想像がつく。消毒などもあるのだろうし、あのお掃除さんが一人で片付けることは考え難い。

心残りと言うほど大げさではないが、最後に挨拶も出来なかったことが少し残念だったのは確かだ。

荷物を玄関に置いて部屋に入るといままでなんとも思わなかった所があれこれと目に付く。ゴミや汚れ、雑に置かれた様々なもの。あからさまに荒んでいる訳ではないが、このまま何も考えず以前のように暮らせない。

前触れもなく倒れたと思いついていたがいまこの部屋を前にすると、そうとも言い切れないのかもしれない。

「体力回復に、やるか」

その日から一週間、無理をし過ぎぬように細かくスケジュールを組んで部屋の一つ一つを磨いていった。病院よりも簡素な洗面台も、散らかった木のテーブルも、引っ越

してから雑な掃除機しかかけていなかった床も、丁寧に磨いた。

手入れをした部屋はいまとは違う落ちつきや居心地を宿し、比例するように落ちてしまった体力も回復していった。

以前の生活より、何もかも状態が良いことは間違いない。

思いがけないことが何かのきっかけになる。今回もそうだったのだろう。起きてすぐに部屋の空気を入れ替えることが日課になる生活など、入院前は想像も出来なかった。

ひと月ほどの断続的な通院で、ようやく次の予約が入らなくなった。心持ち軽い足取りで会計待ちのロビーへ座ると、置かれたテレビからワイドショーが流れている。

こういう番組もしばらく見ていなかったな、と、どこか懐かしい気持ちでぼんやり目を奪われた。流れているのはウェブニュースや電車の中吊りでも目にする政治のスクリーンだった。

「あ」

大型モニターの横に見覚えのある、オレンジのポロシャツ、チノパンの後ろ姿があった。二人組だがその内一人は間違いなくあのお掃除さんだ。

「やっぱり」

「そりゃそうよね」

大声ではないが、張りのある声が聞こえて来る。

ひとときの憩いなのだろう。二人が絶妙な表情をしながら語り合っているのは遠巻きながらわかる。時折見せる笑顔も含め、病室では見たことのない生き生きとした表情だった。

その様子を見ていて、思わず頬が緩む。

『ありがとうございます、あなたのおかげで、元気になってそれを維持しています』

友人同士での会話に揺れている背中に、ぺこりと頭を下げた。

もちろん、声はかけずに。